

『聖ベネディクトの戒律』と道元禅師の『永平大清規』

田中 裕

はじめに

道元には、主著『正法眼蔵』とおなじく重要な一連の実践的著作として『永平大清規』がある。「清規」とは「修道者が守るべき規則」のことで、「清」とは「清衆」つまり修行道場で共同生活をする修道僧を意味する。『永平大清規』と呼ばれる一連の著作は、宋から帰国した道元の道場となった深草興聖寺で出家者や在家者のために制定した規則に始まり、後に帝都を離れて山林に修行場を求めた道元が、越前吉峰寺、大仏寺(永平寺)にて著述した最晩年のものまで含む。

『聖ベネディクトの戒律』が単に修道会の規則にとどまらず、今日のカトリック教会では、世俗の中で福音伝道する献身者(オブラテ)にも読まれているのと同じく、道元の『清規』もまた、出家者だけでなく、在家にあって「菩薩行」をおこなう人の生活の指針として読まれてきた。

道元を高祖とする曹洞宗の峰岸正典老師は、ドイツのオッティリエン修道院とのあいだでの東西霊性交渉を1979年から現在まで続けて実践されているが、同修道院でベネディクト会士と共同生活した経験を踏まえて、ベネディクト会の修道院と道元の清規にしたがう禅の修道生活に通底するものを次のように要約している。

- (1) 早朝起床、坐禅・朝課・朝食。午前は作務・坐禅・勤行・昼食。午後は作務・坐禅・晩課・夕食。夜坐して入眠という修行道場の一日と早朝起床・全体での祈り・個人の祈りミサ・朝食。労働・昼の祈り・昼食小憩後労働・夕方の祈り・夕食・夜の祈り・入眠といった修道院のサイクルはよく似ている。
- (2) 「時の勤行、四時の坐禅」という定めを持つ修行道場と「聖務日課」に規定される修道院ではきわめて似た時間意識とリズムにおいて一日が過ごされている。加えて生涯をかけての修行・修道を志すという共通性もある。
- (3) また、「我を張らない(無我)」ということは禅の修行の眼目であるが、修道士も自己を極端に主張してはならない。聖ベネディクト会則では「謙遜の実践」が「修道の全課程に欠かせない」ことが示されている。
- (4) 集団での坐禅や祈りという宗教的行を務め、作務・労働をするという形態の中に、信仰対象や宗教共同体への自己帰入が希求されている。こうした希求は、諸々の宗教的行為において身体を通じて表現され、自らを小さなものとして、大いなるものに対して畏れと敬意を表す。
- (5) 聖ベネディクト会則(第七章)でも修道士は神への謙遜という「こころ」を日常生活の中で「かたち」に表すことを要請されている。禅でも身体的行為には「仏作仏行」としてより積極的な意味がある
- (6) 修行道場と修道院において最終的に求められているものが、教義の学術的理解というよりも、むしろ宗教的实践、求道(辨道)であり、生涯を通じて行じられる「生き方としての宗教」

が大切にされている。換言すれば、修行僧と修道士は宗教的な生き方を宗教共同体の中で深めようとする者同士として本交流において邂逅したのであり、だからこそ、異なった信心や信仰体系を持つ宗教者同士といえども、両者の間に深い共感が生まれたと言えよう。¹

また、イエズス会の門脇佳吉神父は、道元の清規に従って生きる「行道」のことばの実践にこそ、自然環境破壊を克服するエコロジーの実践を導く「形而上学」があることを強調してつぎのように云っている。²

道元は、第一に、自然と人間を結ぶ原初的な関係を道（仏の御いのち）のはたらきによって根拠づけ、自然の全体と人間の渾身の感覚的結びつきを中心に含みながらも、知恵によって形而上学的エコロジーともいべき道理を確立したのである。このようなエコロジーは知恵に基づくから、西洋世界にも通用するだけでなく、西洋のエコロジー神学の抽象性を克服し、自然と人間との感覚的結びつきを大切にすると共に、知恵（sapientia）による「道なるキリスト」のはたらきでそれを根拠づけることによって、形而上学的エコロジーの確立に道を開くのである。

永平大清規にみられる道元の修道論

永平大清規とは、道元（1200-1253）の定めた次の六つの清規をさす。

『典座教訓』、嘉禎3年（1237）：僧院で台所仕事を司る典座の心得と作法。

『辨道法』、寛元3年（1245）：僧堂における坐禅中心の修道生活の規範

『赴粥飯法』、寛元4年（1246）：僧堂で粥（朝食）と飯（昼食）を喫するときの作法

『衆寮箴規』、宝治3年（1249）：修行僧が看経（読書）や行茶（喫茶の行礼）を行う「衆寮」での規則と誠め

『對大己法』、寛元2年（1244）：「大己」（目上の人）への礼法。謙遜の誠め。

『知事清規』、寛元4年（1246）：僧院で様々な業務を担当する指導者（知事）の責務と選任の仕方

ここでは、とくに、道元が宋に留学僧として聞法の旅に出たときに出会った阿育王寺の老典座との対話が収録されている『典座教訓』に注目したい。そこには、在家と出家の区別を越えた道元の修道論の原点が明確に示されているからである。

嘉定十六年^{みづのとひつじ}癸未（1223）の五月中、慶元府に停泊する船内で、道元が日本船の船長と話をしていたおり、一人の老僧がやってきた。年は六十歳程度である。まっしぐらに船に来て、日本人に尋ねて椎茸を買い求めた。道元は彼を招待して茶をふるまい、その所在を尋ねたところ、阿育王山の寺の典座和尚ということであった。以下、道元と老典座との問答を『典座教訓』に記された通りに再現してみよう。

老典座： 私の出身は西蜀（四川省）です。郷里を離れて四十年になりまして、今年で六十一歳です。これまであちこちの修行道場をあらかた経験してきました。先年、孤雲道権禅師が住持している阿育王寺を訪ね、正式に修行することになりましたのに、無為に過ごしてしまいました。ところが去年の夏の修

¹ 「宗教研究」84巻4輯「宗教的共感の源泉—東西霊性交流の場合」pp. 205-6(2011)

² 「正法眼蔵三参究一道の奥義の形而上学」岩波書店 271頁(2008)

行期間の後、阿育王寺の典座に任せられました。明日は端午の日なので、一つご馳走しようと思ったものの適当なものが何もありません。麺汁を作ろうと思うのですが、椎茸がなかった。そこで特別にやってきて椎茸を買い求め、各地より集まった雲衲³に供養するつもりです。

道元：いつ頃阿育王寺を出てきたのですか？ 老典座：昼食の後です。

道元：阿育王寺はここからどれくらいの距離ですか？ 老典座：三十四五里⁴です。

道元：いつ寺へ帰るのですか？ 老典座：今しがた椎茸を買いましたので、すぐに帰ります。

道元：今日は期せずしてお会いし、のみならず船内でお話しすることができました。これは素晴らしいご縁ではございませんか。私道元が典座禪師にご馳走いたしましょう。

老典座：いけません。私がもし管理しなかったら、明日の食事が駄目になってしまうでしょう。

道元：阿育王寺には、典座寮の仲間で、朝昼の食事を理解・会得している人がいるでしょうに。典座和尚が一入不在であっても、何の不備がありませんか。

老典座：私は老年にてこの職に就いたのです。つまり、おいぼれの弁道です。どうして他人にその職務を譲れませんか。それに来るときに、一泊の許可を得て来ませんでした。

道元：典座和尚はご高齢であられる、どうして坐禅弁道したり、語録を読んだりしないのですか。典座職務に煩わされ、ひたすら肉体労働をして、どんないいことがあるというのですか？

老典座：(大笑いして)

外国の好青年よ、あなたはまだ弁道というものを解っていないし、まだ文字というものを知らないのです。(外国好人、未了得弁道、未知得文字在)

道元：(老典座のその言葉を聞いて、ハッと自分を恥じ畏れおののき)

文字とはどういうものでしょうか、弁道とはどういうものでしょうか？(如何是文字、如何是弁道)

老典座：あなたが質問したところを見過ごさずにいれば、そういう人(文字を知り弁道を体得した人にならないということがどうしてありましょう。(若不蹉過問處、豈非其人也)

道元：(その意味が解らず)・・・・

老典座：もし解らなかったならば、後日いつか阿育王寺に来てください。一つ、文字の道理について語り合ひましょう。(そう話した後、すぐに立ち上がって)日が暮れてしまった。急いで帰ろう。(と言って帰ってしまった)

その年の七月、道元は天童山景德寺で修行をしていた。時にあの典座がやって来て、道元に来て「夏の修行が終わったので典座職を退いて、郷里に帰ることにしました。たまたま同門の者が、あなたがここにいる、と言っているのを聞きました。どうして来て会わないでいられましょう」と言った。

道元は小躍りして喜び感激し、彼を接待して会話をした折、先日の船内における文字・弁道の因縁について聞いてみた。

老典座：文字を学ぼうとする人は、文字の意味を知ろうとするし、弁道に努める人は、弁道の意味を会

³雲衲とは衲(継ぎはぎだらけの僧衣)を纏った雲水(禅僧)のこと

⁴ 当時の中国の1里はだいたい540メートルくらい。老典座は19キロ位の道のりを徒歩でやってきた。

得しようとしませう。

道元：文字とはどういうものですか？ 老典座：一、二、三、四、五

道元：弁道とはどういうものですか？ 老典座：「世界は何一つ秘蔵かつかくしません（徧界曾て蔵かつかくさず）」⁵

道元は、23歳の時に宋で出会った老典座から学んだことについて、『典座教訓』のなかで次のように云っている。「私が多少なりとも文字を知り弁道を会得できたのは、この典座の大恩のおかげである。これまでの経緯を亡き師匠、明全禪師に話したところ、明全禪師はただただ大変に喜ばれた」

参考資料一「蓮の露」の良寛と貞心尼との相聞歌

道元没後約五百年、永平録の「ことば」を読み、感涙にむせて書物を濡らしてしまったという体験⁶を漢詩「讀永平録」に詠んだのは良寛であったが、彼の漢詩や短歌には道元からまなんだ「ことば」がさりげなく読み込まれている事が多い。とくに良寛の弟子になることを志願した貞心尼とのあいだに交わされた次の相聞歌は有名である。（のちに貞心尼自身が編纂した歌集「蓮の露」に収録されている）

貞心尼：（師常に手鞠をもて遊び給ふると聞きて奉るとて）

これぞこれ ほとけのみちに あそびつつ つくやつきせぬ みのりなるらむ

良寛：（御かへし）

つきてみよ ひふみよいむなや ここのとを 十とおさめて またはじまるを⁷

貞心尼：（はじめてあひ見奉りて）

きみにかく あひ見ることの うれしさも まださめやらぬゆめかとぞおもふ

良寛：（御かへし）

ゆめのよに かつまどろみて ゆめをまた かたるもゆめも それがまにまに⁸

⁵ 「弁道（辯道、辨道）」とは「修道がなんであるかをわきまえる」とことと「修道に精進する」ことの二つの意味がある。「文字」とは、先覚者によって書きしるされた真理のことばである。

「世界は何一つ秘蔵かつかくしない（徧界曾て蔵かつかくさず）」とは、森羅万象すべてが何一つとして「道」を説く対象にならぬものはないことを云う。「典座教訓」のなかで、特殊な少数の人にしか体験できない非日常的な場所に奇蹟や神秘を求めることをせず、台所仕事のような日常茶飯の世界の只中に顕現する真理の「ことば」を聴き、その「ことば」に活かされ生きる事を求めている。

⁶ 春夜蒼茫二三更… 慕古感今勞心曲 一夜燈前涙不留 湿尽永平古仏録…（読永平録）

⁷ 「手鞠遊び」に興じる良寛に入門を願い出た貞心尼の歌への返歌。

「突きて見よ、一二三四五六七八九十を十とおさめてまた始まるを」は、道元の典座教訓の中の「文字（ことば）」についての問答を踏まえている。始（一）と終（十）がある手鞠遊びは10回ついただけでは終わらない。常に初心に返って修行を繰返す遊びの中に、「清規」の「ことば」に活かされ生きる修道の心を詠込んだ歌である。

⁸ 道元の『正法眼蔵』に「夢中説夢」という巻があるが、そこでは、我々が堅固な実在だと思っている世界が、じつは夢の如き虚仮の世界であり、真の仏法の世界は、虚仮の世界の住人から見ると逆に「夢」のごとく見えるという言葉がある。顛倒世界においては、真実を説くものは役に立たない夢想家

菩薩の修道について

道元は在家出家を問わず「菩薩戒」を重要視した。小乗仏教のこまごまとした戒律ではなく、戒律の精神を生きること、とくに菩薩として生きる大乘仏教徒は、大乘にふさわしい戒律を生きるべきであるという伝教大師最澄の教えにしたがい、入宋にさいして小乗仏教に由来する「具足戒」を道元は受けなかった。男性出家者の場合は250戒、女性出家者の場合は348戒もある小乗仏教由来の戒律は、「・・・すべからず」という微に入り細をうがつ禁止条項をふくむ小乗仏教由来の戒律であり、道元の生きていた時代には単なる建前だけの慣行にすぎず、厳密にそれをまもるものは少なかった。

さらに「人は本来仏である」とか「一切の衆生は悉く仏の本性をもっている」という大乘仏教の根本的な教えは、戒律の事実上の無視を正当化する危険があった。道元は、労働を仏道修行に必要な修行として取り入れた百丈慧海、それにもとづく「禪苑清規」を参考にしつつ、日本の修行僧に適した清規を制定したのである。戒・定・慧を三学とする仏教の修道は、坐禪（只管打坐）を根本とし、禪定によって生まれる（あらゆる二元性と対立を越える無差別の）智の働きと、（一切の衆生を救済しようとする）菩薩行をすすめる「菩薩戒」にもとづくものとなった。

道元の修道論の根本的な特徴は、「修行は仏になるために行うのであって、一度悟りを開いて仏になればもはや修行は必要ない」と考えるのではなく、「本来人は仏であるからこそ修行するのである」というところにある。修行を証（悟り）の手段と見る二元的な見方を越えた「修証一等」ないし「本証妙修」が道元の修道論の根本であるが、従来見落とされてきたことは、修行は自分一人が成仏するためにするのではなく、一切の衆生が救われることを願って為されるのであるという「菩薩」の誓願があると云うことである。このような「大悲」の「誓願」が道元の坐禪の背景にあること、道元が「禪宗」という呼び名を拒否して、普遍的な救済をめざす大乘仏教の根本精神に立ち返るべき事を説いたことは、とかく禪宗の一つの宗派である「曹洞宗」の開祖として道元を位置づける仏教史家の陥穽ではないだろうか。

在家の修道者の行道の手引き—菩提薩埵四攝法について

在家の信徒のために道元は様々な修道の手引きを残している。普通、在家の仏教信徒に要求されるものは、（1）不殺生（2）不偷盗（3）不邪淫（4）不妄語（5）不飲酒 の所謂五戒であるが、これらは消極的な戒律である。ところが道元は、菩薩道の実践を積極的なにするために、「・・・するな」という戒律ではなく「・・・しよう」という積極的な「法」を説いた。それが「菩提薩埵四攝法」である。「摂法」とは「他者を真理に導く四つの法」というだけでなく、「四つをばらばらに実践するのではなく一つの統合的な法として実践しよう」という提言である。

と見なされるが、道元は、むしろ「夢の中で夢を説く」ことの意義を理解しなければ、仏道はわからないと明言している。良寛の貞心尼への返歌も、「夢の中で夢を語る」ことの大切さをさりげなく示した歌と言って良いであろう。

その四摂法とは、(一) 布施^{ふせ}、(二) 愛語^{あいご}、(三) 利行^{うぎよう} (四) 同事^{どうじ} である。

布施とは、不貧^{ふとん} (むさぼらないこと) である。むさぼらないとは、「人の気に入らぬこと」と、また「人の感謝をむさぼらないこと」である。道元は、「自分が捨てるつもりであった財物を、見知らぬ人に施すように、気前よく布施をする」ことを勧める。現在では、布施とは専ら在家者が出家者に与えることだけを指す意味となったが、道元の云う「布施」には在家と出家の差別はない。与えるものが軽少であるかどうかは問題なのではなく、それが相手の役に立つかどうかは問題なのである。道元は与える者と与えられる者を差別する二元性を突破して次のように云う。

「〔布施は〕自分を本当の自分とし、他者を本当の他者とするのである。布施の現わす力は、遠く天界や人間界にも及び、悟りを得た賢聖たちにも通じる。」

「舟を浮かべ、橋を渡すのも、布施の行いである。さらに深く学ぶならば、生きることも死ぬことも布施である。暮しの道を立てることも、生産に携わることも、布施でないものはない。」

「アショーカ大王がわずか半箇のマンゴーで数百の僧たちを供養して、供養の力の広大さを示したことを、布施をする人たちは、よくよく学ぶべきである。」

「衆生のこころを動かすことはむずかしい、そのため一財でも与えて、道が成就するまで導いて行くのである。それは必ず布施によって始めるべきである。そのため布施は、求道者が完成すべき六つの行為 (布施、持戒、忍辱、精進、静慮、智慧) の一番はじめにあるのである。」

仏教の伝統では「愛」ということばは「執着」を示すものとして否定的な含意があった。しかし道元は「愛」に肯定的な意味をこめて「愛語」を「布施」とともに菩薩の法と考えた。

道元の云う「愛語」とは、さしあたっては、「人に会った時に 慈愛の心を起して、やさしいことばをかけること」である。決して暴言や悪言を用いず、「お大切に」とか「御機嫌いかがですか」といって相手の安否を問うことを意味するが、それだけに留まらず、「愛」の「ことば」に深い宗教的な含意があることを述べている。

「仇敵どうしを和らげ、徳のある人たちを仲よくさせるには、愛語がその基本である。向かいあって愛語を開く人は顔を歓ばせ、心を歓ばせる。蔭で愛語を聞く人は、肝に銘じて忘れない。愛語は愛心より起り、愛心は慈非心をもととしているのである。愛語が天をも回らす力を持っていることを知りなさい。愛語は、相手の長所をほめる以上のことなのである。」

西洋近代の功利主義は、自利と利他の計量比較によって「利」の最大をめざす社会倫理を構築しようとしたが、道元の云う「利行」は、自分の利益と他人の利益の差別、身分の高低による差別を越えた宗教的徳として語られている

「利行というのは、身分の高い人に対しても低い人に対しても、相手の利益になることをすることである。例えば相手の遠い未来や近い未来に気をくばって、その人の利益になることをするのである。昔、ある人は籠のなかの亀を助け、ある人は病気の雀を介抱した。彼らはなんの報酬も期待せず、ただ利行をするという気持にかられて、それをしたのである。」

「怨みを持ったものに対しても親しいものに対しても、同じように利益を与えなさい、それが自分をも他人をも利することなのである。もしそのことがわかれば、草木風水に対しても、休むことのない

利行がなされるであろう。真理の道を知らない人々を救うために、ひたすら努めなさい。」

日本人の社会倫理では、自分だけが特別であろうとしないこと、が重んぜられる。このような、出る釘は打たれる、ことを用心するような消極的な処世訓とは違って、道元の云う「同事」は、次のように他者に対する積極的な関わりを求める菩薩行である。

「同事ということがわかれば、自分も他人も一体となるのである。白樂天の詠んだ「琴・詩・酒」は、人を友とし、天を友とし、神を友としている。人は琴・詩・酒を友としている。琴・詩・酒は、琴・詩・酒を友としている。人は人を友とし、天は天を友としている。このような道理を学ぶことが、同事ということ学ぶことである。」

「同じ事をするということは、作法にかなった事、おごそかな事をすることであり、すぐれた態度を持つことである。それには、他入を自分の方へ回心させて、自分と同じことをさせることもあろうし、自分が他人と同じ事をするともあろう。自他の関係は、時に応じて自由自在なのである。」

「管子がいつている。「海が大きいのは、水を拒まないからである。山が高いのは、土を拒まないからである。すぐれた君主が多勢の人を治めているのは、入をいとわないからである」。海が水を拒まないことが同事なのである。更には、水が海を拒まないことを知るべきである。」

「人が集まって国となり、勝れた君主を待ち望んでいる。しかし勝れた君主が勝れているのは、人をいとわないからだということを知る人は稀である、そのため人は、勝れた君主にいとわれないことばかり望んで、自分たちが勝れた君主をいとわれないことには気がつかない。しかし、同事ということとは、君主の方からも、凡人の方からも、両方からなされることである。

「従って、求道者たちは、それ（四摂法）を行うことを願うのである、どうかあなたがたも、柔和な顔をして、すべてのことに向かいなさい。これら四つの行いが、それぞれ四つの行いをふくんでいるから、それは十六の行いである。」

黄泉にまで下る菩薩の道一道元の最後の在家説法と遺偈

建長五年（1253）、道元は波多野義重および弟子達の請願に従って上洛、西洞院の覚念の邸で病氣療養のかたわら在家の人々に説法していた。ある日、邸中で経行しつつ妙法蓮華經神力品の巻を低声にて唱えた後、それを自ら面前の柱に書付け、その館を妙法蓮華經庵と名付けたと言われる（建徳記巻下などの伝承による）。そこには次のような言葉がある。

「僧坊にあっても、白衣舎（在俗信徒の家）にあっても、殿堂にあっても山谷曠野にあっても、この処が即ち是れ道場であるとまさに知るべきである。諸仏はここにおいて法輪を転じ、諸仏はここにおいて般涅槃す」

僧坊にあっても在家の弟子の家であっても、今自分がいるその場所こそが「道場」であり、宗教的な廻心〔轉法輪〕の場所であり、「完全な平和（般涅槃）」に入る場所であるというのが、道元の最期の在

家説法の趣旨であろう。⁹

その翌朝、彼は居ずまいを正して次の遺偈を弟子達に残した。(建徳記)

五四年照第一天(五四年第一天を照らす)

打箇躡跳 触破大千(この躡跳を打して大千(三千大世界)を触破す) 嘆(にい)

渾身無覓 活落黄泉(渾身に覓むる無し 活きながら黄泉に陥つ)

道元禅師の遺偈の「活陷黄泉」(活きながら黄泉に陥つ)という結びの言葉は、何を意味するのであるか。この遺偈を単独で考察するのではなく、師の如浄と弟子の懐奘の二人の遺偈との関連で考察したい。六六歳でなくなった如浄禅師、八三歳でなくなった孤雲懐奘のどちらの遺偈にも「黄泉に陥つ」ないし「地泉に没する」の句があるからである。

如浄禅師の遺偈：六十六年 罪犯彌天 打箇躡跳 活陷黄泉 嘆 從來生死不相干

(六六年の生涯、罪犯は天に満ちている。この肉体を打って、活きたまま黄泉の国に陥る。従来の生死は相干しない)

孤雲懐奘の遺偈：八十三年如夢幻 一生罪犯覆弥天 而今足下無糸去 虚空踏翻没地泉

(八三年の私の生涯は夢幻のようだ。一生の罪犯は弥天を覆っている。そして今私は足下に糸なくして去り、虚空を踏まえ翻って地下の泉に没する)

如浄—道元—懐奘 と受け継がれた一連の遺偈に通底するものを、徹底した菩薩行として、衆生の罪を一身に引受けて黄泉に下る菩薩の懺悔道と捉えることができる。菩薩の道は、一切の衆生を救済しようという大悲の誓願に基づいている。如浄から嗣法し、懐奘に伝えた道元の仏道は「見性成佛」を云う「禅宗」の禅ではなく、大悲の誓願に基づく菩薩行としての坐禅であったことは、如浄が道元に語った次の言葉が示している。

いわゆる仏祖の坐禅とは、初発心より一切の初仏の法を集めんことを願ふがゆえに、座禅の中において衆生を忘れず、衆生を捨てず、ないし昆虫にも常に慈念をたまひ、誓って済度せんことを願ひ、あらゆる功德を一切に廻向するなり。(『宝鏡記』)

如浄の遺偈には「罪犯彌天」、懐奘の遺偈には「一生罪犯覆弥天」の言葉がある。この菩薩の懺悔は、衆生の犯したすべての罪を自己自身の罪として引き受けるところから発する言葉である。それこそが、自己と無関係なものは何一つない縁起の法を生きる菩薩の心であろう。

面山瑞方が編集した『傘松道詠』に収録されている道元の道詠

愚かなる我は仏にならずとも衆生を渡す僧の身ならん

草の庵に寝ても醒めても祈ること我より先に人を渡さん

もまた、菩薩行を説くものであるから、如浄から菩薩戒をうけて嗣法した道元、その道元との対話を記録した懐奘の遺偈もまた「黄泉に下る菩薩」の「行道」の言葉として読むことができよう。

⁹病中でありながら在家説法を続けていた道元によせて、私は、なぜか宮沢賢治が病死する直前まで農民の相談に乗っていたことを思い出した。晩年の道元は厳しい出家主義の立場であったといわれることが多いが、私は、道元は最期まで在家の信徒のことを忘れていたわけではないと思う。